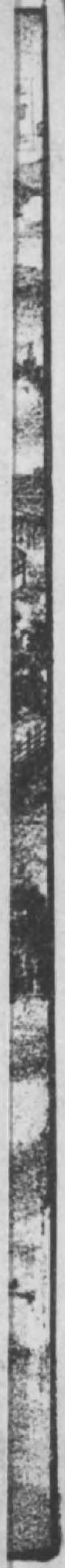
特52-338イ
1200800238325

始

農學士
農藝化學士 今井秀之助君序
蓑笠學人永澤小兵衛編著

青根温泉志 完

明治廿五年九月訂正三版
永澤氏藏版



青根温泉宿不忘閣真景

宮城縣管内鑛泉涌出地圖

青根温泉志序

天の萬物を生する豈に偶然ならんや、海濱には魚鹽の利あり、山谷には鑛泉の惠あり、而して人世の苦境にも亦樂土の存そるあり、然れとも苦樂亦一ならす、或は耽慾荒淫以て生を貪るものあり、淸雅高尚以て世を樂むをれあり、徒に生を貪る者與に語るに足らそ、眞に世を樂む者得て山水の秀靈、雲烟の變幻を說くへし、惟ふに鑛泉れ効も專ら治疾にありと雖も、其眞味に至りては蕩邪流悪、氣を吸ひ神を暢ふるに外ならす、ウァルトン氏曰く「景色の變換も、亦一二の疾病を治そるの効あり、例へハ鬱閉症の患者、都市を去りて開豁れ地に移り、周圍の緑陰なる山水れ幽景を遍覽して、遂に快治するか如し」と、以て證すへし、仙南青根温泉場は、山高く、水淸く、眺臨の爽豁なる、室宇の雄壯なる、吾國下三十餘泉に卓絕す、是を以て四時來

り澡浴する者、年に十萬人に下らすと云ふ、余嘗て青根に遊ひ、その造化の大觀を賞し、また一書の之を記述せしものなきを惜めり、近頃、知友永澤君、温泉志を著はし、余に校閲を請はる、此書素と一小冊子に過きすと雖も、克く其梗概を悉せり、謂ふへし、青根温泉の知已なりと、夫れ山靈地異、何ものか人の稱揚を竢たさらん、而して今や景と書と相竢て始めて完璧を成す、余復た何をか惜まんや、寄語す、世の精神を養ひ樂土を探らんと欲する人、一たひ此好侶を携へ、飄然去て朝には不忘閣畔に清泉を掬し、暮にも翠嶂館上に光風を弄し、以て天の萬物を生する實に偶然にあらさるを知れ、是を序となす、明治二十四年七月下澣、仙臺僑居南窻下に於て

今井秀之助撰

自叙

佐藤醫學博士嘗て温泉誌の必要を論して曰く「人の生を養ふの法多しと雖も。之を要するに。身躰と精神を養ふの兩途に外ならさるなり。而して之を養ふの法少なからすと雖も。自ら弊害なしとせす。余は常に兩なから之を養ふに最も益多く。害少なき者を温泉となす。抑も温泉は健康に益あり。疾病に効あるものは。各温泉中有効の物質を含みて。諸般の躰質或は疾患に適應するに因るのみにあらす。加ふるに土地多くは閑雅幽邃。樹木蒼鬱。空氣新鮮。自ら山水の景ありて人の神思を暢はしむるに由なり。然り而して温泉に浴する者は固より豫め温泉は効用利害よりし。土地の寒暖。高低。浴法等に至るまて詳かに知らさる可からす。近頃世俗と見るに。浴泉大に行はれ。温泉の効用を詳らにせすして。漫りに痼疾を山谷に載するもの

あり。却て害を招くに至る。偶々温泉に由て癈を起し。奇驗を見るものあるへしと雖も。是必竟温泉に由て病を試むるの徒のみ。僥倖と云ふをし」と。余の斯篇に於ゐるも亦此意に外ならす。然れとも素と薄識寡聞。特に醫事に暗し。焉んそ克く虎を畫て犬に類するの誹と脱れんや。唯頼ひに諸大家の校閲の勞を取らるゝと。平素聊か抱負する所あるを以て。自ら揣らす操觚の重任を負ふ。浴者これに依りて萬一を裨益せは。啻に余か面目たるのみならす。また泉主の大幸ならん

明治廿四年七月下浣　　蓑笠學人識

凡例

一本書は温泉主の需に應し、拙著宮城縣鑛泉誌より單に本泉に關する記事を轉載せる所なり、故にその詳細を知らんと欲する浴客は、請ふ鑛泉志に就て一讀の榮を垂れよ

一書中氣候の温度は華氏撿温器を以てし、泉質は設氏を以てす

一本書載する所の名區は外青根の附近は鬼石原、七日原、三階瀧、不動瀧等の勝區に乏しからすと雖も宮城縣鑛泉志に於て、遠刈田温泉は條に附記したれば特にこれを省く

一今回本書を三版に附するや、一二增訂を加へしものありと雖も、猶は誤脱の多からんことを恐る、覽者諒焉

編者誌

目次

一浴者心得　一頁
一地理　一頁
一位置　二頁
一地質　三頁
一氣候　四頁
一浴場　四頁
一泉質　六頁
一効能　七頁
一來歴　八頁
一湯戸　十一頁
一浴客　十二頁
一交通　十三頁
一詞藻　十五頁
一散策地　廿二頁
一社寺　廿七頁
一物産　廿七頁

浴者心得

抑々鑛泉の効能は、全たく其中に含む所の諸成分に由ると雖ども、亦此一點にのみ歸す可きものにあらず、土地の高低、氣候の寒温、近圍の風景浴場の陋美、食物の良悪等は、皆奏功の如何に關係を有すれば、若し其詳細を知らんとする病浴客は須らく良醫の指揮に從て澡浴するを良とす、況んや鑛泉浴療の目的は、重に慢性諸病に應用するにあるを假令輕微なりと雖ども之を急性諸症に濫用す可からず、又其應用法の如きも泉質の異同強弱、疾病の種類、輕重等に因て差異あるものなれども、固より一定の準規を以て羈絆す可からずと雖ども、通常心得となるべき要件を左に摘載す

第一　鑛泉療法に適するの時期は、本邦に於ては凡そ四月一日より、十月一日に至る間を最良の期と爲せども、土地、氣候は寒暖に因て適宜伸縮せざる可からず、又溫暖の地に於て冬期浴療を爲さんとせば、宜しく浴室の構造に注意して、隙風の竄透を防ぐ可き裝置すべし

第二　療病者入浴時日の長短ハ、其人の體質、及び鑛泉感應の強弱に因て各々異る所あれば、之を定むること甚だ難し、然れども三週間を以て通規と爲さば大過無きものゝ如し、固より病症ハ模様に從て之を伸縮するハ勿論なれども、連綿入浴して四、五週間の久きに彌るは却に惡し

第三　浴場に着し身躰疲勞せるものは飲食を定め靜息して攝生を守ること一二日後、飲用、浴用を始むるを良とす

第四　飲用法の分量を、鑛泉の性質と、病性、躰質に由て一定せず、例へば含鐵泉の如きハ、食鹽泉或ひは亞爾加里性炭酸泉に比すれば、大に其量を減せざる可らず

凡そ飲用は先づ少量（一日一回凡そ三勺餘位一日五勺乃至二合五勺）より始め、患者適宜ハ量に至るも、一日の量凡五合五勺を超ゆ可からず、又俗間にも浴槽中の不潔泉を飲用する者あれども、是は大なる過失なり、飲料は必ず泉源の清潔なるものに就き温度高きに過ぐるときハ放冷して適宜に至らしめ服用すべく、又必ず急忽にせず徐々に爲すを要す、其適當の時ハ朝は七時、八時夕は五時、六時の頃を良とし、飲服後少しく運動を爲すべし

第五　入浴ハ一日一回、或ひハ二、三回患者の適宜に由るべし、朝は八時、九時夕ハ五時、六時を良期とすれども空腹及び滿腹のときは共に宜しからず、然るに浴度多ければ効能速ならんと忘想し、一日數回の浴を取り爲に皮疹、浴熱等を發し、甚だしきに至りては危篤の患害を招ぐもれあれば必らず多浴を愼むべし

第六　入浴中ハ時間と、温度とも亦鑛泉の性質と、患者ハ病性、躰質とに由て同しからず、初時は概して入浴時間を短くし、漸々之を長くすべし、即はち初は十分時より漸く慣れて堪ゆるに從ひ、長きは三四十分に至ることあり、凡そ成分少量なるものは刺戟少なきを以て、他の強性鑛泉よりは、長く浴するを得るものとす

温度も亦病性、躰質等に從て同一ならず、本邦に於ては習慣に由て高度

は温を用ゐるもの多し、然れども高度の温を用ゐるは宜しからざること多し、温度は冷なるも設氏二十九度より以下なるべからず、熱なるも四十三四度を超ゆべからず、但し醫師の特に冷熱を指揮するものは此限外なりとす

第七　浴後は乾きたる浴巾を以て全身を拭ひ乾かし、強く摩擦するを良しとす、而して直に衣服を着し、晴天の日は三十分位の散歩をなし雨天ならば室内に於て適宜運動するを良とす、然れども倦疲れて之を好まざるものは強てなす可からず

第八　入浴の間若し皮疹を發するときは、一時中止するか、或ひは、鑛泉に常水を混じ稀釋すべし、又入浴の爲めに發熱することあり、然るときは數日浴を止め、飲用を減ず可し、又世には甲泉に入浴して未だ數日を經ざるに、更に乙泉に移り、次で丙泉に轉ずるものあり、是は徒らに身躰は疲勞を増すのみにして、効驗も又少なければ必ず禁ずべし

青根温泉志

仙臺　蓑笠學人　編著

◎地理

青根温泉は陸前國柴田郡(古書に芝田とも書せり)川崎村字前川にあり、柴田郡は國の極南に位ゐし、東南の二方は磐城國刈田、伊具、亘理の三郡と互ひに境界を接し、北は全く名取郡に包まれ、西は大山脈と限りて山形縣羽前國と隣る、郡中山岳多く之より流出する大小の河川も亦頗る多し、東西九里、南北六里、面積十九方里にして戸數三千七百餘、人口凡そ三万を有す、前川は往時、砂金莊に隷し、獨立の村名なりしが明治二十二年、今宿、小野川内、元砂金の四村と合併して今名に改むる所ろなり

此地より東北、川崎驛へ山道三里、西南峨々温泉へ一里半、東南遠刈田温泉へ一里十三町と距て、大河原鐵道停車場へは凡そ七里半とす、而して仙臺に通ずるに二道あり、之を右すれば永野、宮、大河原の諸驛を經て直ちに瀧

車に投ずることを得、且つ道路平夷にして車馬を疾驅せしむるの便あれども、十六里半の長途も僅かに半日と費さゝるべく、又之を左して川崎驛を通過すれども、行程十二里に充たざれども中間諸處に山阪ありて馬にあらざれども通せず、聞く早晩此地と遠刈田間に馬車鐵道を敷設し、專ら浴客來往の便を圖るの計畫ありと

◎位置

温泉場は不忘山の分脈、花房山の中腹なる青根と稱する地にあり、西方に不忘山三里を負ひ、西北に花淵山二十丁を控へ、西南に物見岩、倉石山一里半を望む、而して六方山二十四丁、川音岳十五丁等は北方に並峙するを以て、地勢は自から雄壯高隆にして海面を拔くこと殆んど二千尺、遙かに東、南の二方を開く、之を遠くしては桃生、牡鹿の諸勝を歷々眼下に點綴し、之を近くしては宮城、名取、黑川は峯影水態、盡とく坐席に入り來る、その開豁は眺望は以て管內各温泉場を壓倒すべし、人家十四戸あり、五戸は温泉宿を營なみ他は皆浴客に需用品を鬻ぎて生計となす

◎地質

地盤は安山岩より成立し、地味は同岩の霉爛朽敗したるものに、古代火山の噴灰を多量に含蓄するを以て耕作に適せず、地震は通常最とも少く、且つ輕微にして開湯以來未だ災害を蒙ふりしことなしと云ふ、近傍に火山質結晶片岩を產ず、頗ぶる庭石、飛石等に適せり、土俗これを片石と稱す

●飲料水　水は飲料、雜用ともに筧を以て、鰐谷は清水を導びき來るもの數條あり、其距離三四町より半里に餘る、就中二種の水質は左の如し

水質檢查成蹟表（明治廿二年三月陸軍一等軍醫正中泉正氏試驗）

	臭	味	清濁	亞硝酸	アンモニア	コロール	硬度	有機物	顯微鏡所見
飲料水	○	淡	透明	痕	○	一、四	二、〇	一、九〇	極テ僅微ノ植物殘渣
雜用水	○	淡	透明	微	○	一、七	二、五	二、六九	少量ノ植物殘渣

備考　表中記載せる處の物質は撿水十万分中に含有する量にして飲、雑雨水共に谿流の引水なり

◎氣候

土地高峻なるが故に寒氣猛烈にして、殊に冬期は西北の強風多く、積雪二尺餘に及び、毎歳十二月に降り、翌春三月に至りて消解ず、嚴寒は候、稀には華氏廿七度に降ることあるも無きにあらず、然れども夏日は空氣清涼にして炎暑苦しき時すら猶ほ九十度に騰ることなく、また蚊帳を用ゐるの煩ひなし、而して曇天、雨日には泉温を増し、風日には稍熱度を減ず、若し大雨の後谿水漲るときは、泉量も亦著るしく増加するを常とす

◎浴場

温泉の湧口は三ヶ所にして浴室六宇あり、即ち大湯、瀧湯、上等浴室、上新湯下新湯及び名號湯とす

●大湯　浴室を距る數歩、佐藤仁右衛門居宅の傍はらに湧出づ、埋樋を設けて之を導びく、泉源は頗ぶる廣大なるを以て、その泉量の多き世稀に見る所にして、二條の瀑状をなして浴池に灌ぐ、泉質は透明瑩徹、能く池底の秋毫も數へ得べし、浴室六間四間は廣濶清淨にして浴池五間二間半は軟石を以て之を疊む、傍はらに上等浴室二間半一間半あり大湯を導びき、賓客澡浴の用に備ふ

●瀧湯　大湯を導びき瀑状となし浴室を東、數十間の崖腹に造り、局部病者の療浴に供す、又下新湯の室内に一浴池あり、これまた大湯を導びく

●新湯　源泉は浴室三間二間半の西北、八町餘の谿間に湧出づ、導管を敷設して之を引來り、大湯の北、數十間の處に浴池二間半一間を造りて上新湯と稱し、更にこれを大湯の東、丹野七兵衛門前にある浴室四間に三間半の浴池二間半一間半に導びきて下新湯と名づく、此他枝泉を名號湯の傍らに引き、方一間許の小浴槽を据ゑ、入浴に供するもあり

●名號湯　大湯の北凡そ二町、日吉小祠の下より湧出づ、長十間許の埋樋を以て浴室五間二間の傍はらに導びき、爰に一池を穿ちて潴溜せしめ、更に筧

を以て浴池に注ぐ、浴池は木造にして其大さ殆んど上新湯に同し

◎泉質

●大湯　宮城縣衛生課の試驗に據れば此温泉は弱鹽類泉に屬す、其定量試驗の成蹟は左の如し（泉温四十三度、浴池は四十度）

硫酸加僧母	〇、〇六一六	硫酸那篤僧母	〇、二三七二
格魯兒那篤僧母	〇、〇八五一	炭酸那篤僧母	〇、〇七八七
炭酸加兒瘦母	〇、〇三八〇	炭酸鐵	痕跡
有機物	痕跡	游離及半抱合炭酸	〇、〇七八七
硅酸	〇、〇四二〇	固形物惣量（一リーテル中）	〇、五四二六

●新湯　仝上試驗に據れば此温泉は鹽類泉に屬し、大氣温二十九度なれど此は泉温五十六度、浴泉は四十二度にして、泉質は透明無色、且つ無臭なるも褐色の沈着物ありて、其浴池に潴溜するものは稍白濁を帶び中性の反應を呈し、味ひは大湯と同じく稍鹹澁なり、其定性試驗の成蹟は左の如し

硫酸亞兒加里	多量	鹽化亞兒加里	中量
格魯兒那篤僧母	少量	炭酸石灰	少量

固形分の含量は大略一千分の一

●名號湯　仝上試驗に據れば、此温泉は鹽類泉に屬す、其定量試驗の成蹟は左の如し（泉温五十二度、浴池は四十三度）

硫酸加僧母	〇、一〇八〇	硫酸那篤僧母	〇、二一七五
格魯兒那篤僧母	〇、三五一七	炭酸那篤僧母	〇、一五二三
炭酸加爾瘦母	〇、〇九八一	重炭酸亞酸化鐵	痕跡
有機物	痕跡	硅酸	〇、〇四八五
游離及半抱合炭酸	〇、一三一四	固形物惣量（一リーテル中）	一、一七五

◎効能

●大湯及名號湯醫治効能　各種の慢性僂痲質斯及び仮性關節強直、或は僂痲質斯性筋肉彎縮性、慢性痛風、諸焮衝或は創傷後の滲出物、或は組織肥

大、例令ば慢性肋膜炎、子宮周圍蜂巣織炎、骨盤內膜炎等の滲出物を吸收し其肥厚を解散す、神經機亢盛の諸症或は各種神經の麻痺、久經の腦脊髓中風、中覺過敏、依卜昆垤里、歇私的里、神經衰弱症等に効あり

但新發れ腦中風、脊髓癆腦、腫瘍等より來る漸進麻痺にも禁ずべし

婦人生殖器れ慢性諸病、貧血諸病及萎黄病、腺病又れ重病後の快復期、慢性皮膚諸病、頑固潰瘍、遲鈍性創傷、瘻瘡及び骨瘍、慢性貌禮篤病、腎盂加答兒、其他累久の楳毒、水銀劑療法後等れ患者には其時期と選び用ゐて効あり

●新湯俗傳効能　金創、折撲、疝氣、挫傷、湯火傷、蟲類咬螫毒、僂麻質期、痔漏、膈胃諸病、赤白帶下、皮膚諸病、婦人生殖器諸病、脚氣等なり

◎來歷

●大湯　傳へ云ふ、昔時本郡前川村字八澤屋敷に佐藤彥惣なる者あり、天文十五年四月、佐藤喜右衛門、丹野七兵衛、佐藤權十郎等と相伴ふて深く山徑に入り、蓑を編製る料にとて、古き檍木を伐採し、乃ち樹皮を剝がんと根傍に近づきしに、其周邊より溫氣微かに昇騰して沸々湯泡を發生す、四人怪みて地を穿つこと未だ幾尺あらざるに、果して一泉を獲たり、檍木俗に呼びて青木と云ふ、依て青根温泉と名づけ、是より四人居を此地に移し互ひに協力して荊棘を闢き、湯槽を設け、以て澡浴に資す、爾來連綿として子孫今日に繼續すと

按ずるに。彥惣の後裔佐藤氏所持の古文書に。其祖先ハ八澤豐後と稱し寛正年中(凡四百三十年前)まで前川村八澤屋敷に住し。世々川崎の城主。砂金佐渡の家老たりしが。天正年間掃頭の代に二男彥惣を青根に移すの一項あり。前說と符合す。然れども青根名稱の起源に至りては。頗ぶる卑俚に近くして容易に信ずべからず。たゞ此地樹林蒼翠たるの故を以て。或は青峯。蒼嶺等の文字を用ゐる者ありと雖ども。皆これ風騷者流の好事に過ぎず。

又按ずるに。青根は北海道舊土人語の所謂「イワチ、ナイ」か。イワチ約すればワチにしてワチと通じナイも亦チとなる即ち温泉涌出地の義とす。或ハまた眾に「ワチ、ナイ」即ち善知鳥澤の義歟。善知鳥は俗にカトフ鳥と呼び。其形雉子鷸に似て大さ小鴨に類し。嘴ハ太くして前尖り。眼下肉つきの處高く出てたり。故に海邊又は山脈の高く出てたる崎をカトフといふこと。古くより我奥州の方言に止まらず。遂に諸國の地名と成れるもの多し。是れ皆舊土言ワチ即ち善知鳥より其意義を取り來りしものなり。現時猶ほ諸所にワカ(王)澤。若くはチカ(翁)澤の

地名を存するは、其源をツチ澤に發するもの多し、美濃國御岳驛東のカトフ村、信濃國のカトフ坂(烏頭と書す)等も亦概ね此類なりとぞ

此地を距る北方三里許にして八幡窟あり、危巖數百尋、下に孤洞を存す、傳へて源義家朝臣東征の時暴雨を避けたる故跡と稱す、洞中空濶にして二十餘人を容るゝに足る、是れ豈に往時蝦夷穴居の遺物たらざるを知らんや、是を以て察するも、青根の稱は蓋し蝦夷語の轉化たるや疑ひなし

●新湯　此湯は初め享保五年六月、彦惣等子孫の發見する所に係り、一たび開湯せしも、通路嶮惡にして浴するもの極めて少なかりしより、幾くもなくして廢湯に歸す、其後榛莽の中に埋沒して世に知られざること數十年なりしが、明治八年再び之を掘鑿し、遂に埋樋を通して今の浴室に導びき、同年十一月を以て浴用に供せり、故に此稱ありと云ふ

●名號湯　天文年間、彦惣等の開始する所にして、發見は大湯と同時にあり、口碑に名號湯は病者、彌陀の名號を唱へて入浴せしに、宿痾忽ちにして癒たるより起れりと傳ふれども、奥羽觀迹聞老志青根温泉の下に曰く東北有古温泉曰女御湯又寛永十九年五月二十五日、青根屋敷竿入持高調の古記には、妙子下屋敷と記し、封内風土記、柴田郡前川村の條に曰く、按湯泓有二、其一號大湯(中暑)其二號妙護湯と、又一説に泉源に阿彌陀佛の堂あるを以て名づくと、諸説區々にして其孰れか異なると詳らかに爲ず

◎湯戸

泉主にして温泉宿を兼ぬるものすべて五戸あり、以て一時に千二百餘名の宿泊に充つるに足る、皆湯泓に傍ひ業を營めり、その大湯に接し、新湯に隣るものを佐藤仁右衛門、丹野七兵衛佐藤重太郎の三戸とし、仁右衛門を古來不忘閣と稱し、大小八十の客房を備へ、舊藩の頃永々湯守を命ぜられ、七兵衛は翠幃館と稱し、重太郎は道南に二十の客室を有して新湯と相對す、又名號湯に屬する者は佐藤文四郎、丹野七三郎の二戸にして、各々二十箇の坐席を有す、之を要するに青根は浴室より坐席、器什に至るまで、萬般に清潔善美を盡し、就中建築の宏壯雄偉なるは、その風光の佳絶と併せ賞して、管内無双と稱するも、亦敢て誇言にあらざるべし

●諸費　凡そ浴客は湯戸に投ずるや、必らず旅籠、自炊何れにか依らざるべからず、旅籠は通常これを上、中、下の三級に區別し、一晝夜の宿料は上等を金三拾五錢とし、中等を二拾八錢とし、下等を二拾四錢とす、而して自炊は油費を除き薪炭料、席費として一日金八錢より六錢五厘の間を納る、普通の寢具一襲の損料は、一週間金二十六錢乃至三十四錢にして、それ特に暖衾錦褥に起臥せんと欲せば、須らく五拾錢以上壹圓五拾錢を投ずるを要す、又一週間貳參圓の席費を拂はゞ、一室を擧げて客の自用に充つることを得べし

●需用品　日常必需の物品は、概むね之を温泉宿に備へ置き、野菜果實の類は、毎朝市場に於て求むることを得れども、若し欠乏を告ぐるときは、大河原、村田の二驛、刈田郡白石等に仰ぐが故に、不自由を感ずること極めて少なく、朝夕は鬼石原牧場搾取の濃厚なる牛乳を飮用するの便あり

◎浴客

從來の經驗に依れば、浴客總數は例歳十万人以上に及ぶ、蓋し此地は尤も夏秋の遊浴に適すると、刈田岳登攀の行者夥たゞしきとに因る、多くは子宮病、上衝、眼疾、脚氣等の患者にして、春は養蠶家多く、夏は官吏、學生多く、秋は四民群集してその熱鬧殊に甚だし、之に反して初冬は避喧の人に多しとす、而して此間最も雜踏を極むるは、八月中旬より十月中旬にして、四、五、六月之に亞ぎ、頗る寂寥を覺ゆるは十二月より翌春二月迄の間とす、管内の浴客は重に仙臺以南の諸郡より來り、黒川、牡鹿の二郡之に次ぐ、管外にては福島縣の北部過半を占め、山形縣東、西、南は三置賜及び村山の四郡も亦多しとす

◎交通

●郵便局　遠刈田にありて爲換金事務をも扱ひ、此地に柱函を設く、集配の度數も日々午前、午後の二回にして、東京其他各處の書信に、新聞紙に、皆日暮に至れば閲讀することを得、但十二月より三月に至る四月間は、來客少

なきを以て一回れ配達とす

●車馬　先年、遠刈田温泉場に達する道路を開鑿して行旅の便を與へしも、未た腕車、馬車を駢行せしむるに足らざるを覺り、昨秋更に大土工を興して、岩石と碎き、峻嶮と夷らげ、大河原、白石兩鐵道停車塲間に定期往復馬車を開き、滊車便と聯絡を通ぜたれば、その利便なるまた昔日の比にあらずと云ふ

青根温泉場より各地へ達する車馬普通賃金表

種別＼地名	遠刈田へ	川崎へ	宮へ	白石へ	大河原へ	仙臺へ
人力車	拾二錢		四拾錢	五拾錢	仝上	滊車賃トモ七拾錢
貸馬	拾錢	貳拾錢	三拾錢	三拾五錢	仝上	川崎通五拾五錢
馬車	五錢	○	拾九錢	二拾四錢	二拾五錢	大河原通リ四拾五錢

仝各地への里程概畧表

青根温泉場	遠刈田へ一里十三丁	鎌先温泉へ四里十八丁	山形縣上ノ山温泉へ七里	笹谷峠越山形市へ十一里	福島町へ十六里	不忘山越米澤市へ十六里
ヨリ	永野へ三里十八丁	秋保温泉へ五里十八丁	作並温泉へ十一里	不忘山越山形市へ八里	福島縣相馬へ十七里	

◎詞藻

此地開湯以來已に四百年を經たり、之を古記に徴するに、享保三年より寛政元年に至る八十一年間に、國守及び夫人の枉駕するもの前後凡ろ十四回、一門、一家の輩に至りてハ殆んど十三家の多きに至る、故に別に殿閣を造營して青根御殿と稱し、以て國守の旅館に充てたり、此間鴻儒、名僧れ陪從、遊浴するもの頗ぶる多く、隨つてその遺墨も亦尠しとせず、今左に一二を摘載す

藥師堂奉納和歌　原作十四首 今錄十首

仙臺中將吉村朝臣詠歌

大年　釋　香國和韻

夜落葉

むかひ見る月のためとやよな〳〵におち葉をいそく軒のやま風

半鈎新月入籬櫳、暗喜明朝涉彼崇、支枕頻驚謬作雨、開門是葉落山風

初雪

山はや降そむる雪のあしたにもふもとの里やまたしくるらむ

山窓起坐聽蕭々、正是千峯初雪朝、不待一番寒徹骨、催梅獨自歩蕪嶢

名所雪

雲をさへふきうつむかとおくる夜のいこまの山は雪にくはなし

富士終南海國殊、江天連作雪銀區、東西隔越名唯在、南北平鋪疆亦無

深雪

しもさやきあられみたれし呉竹のちひろの陰もゆきにむもれて

形雲密布雪皚皚、平地少焉三尺堆、想見前村梅破玉、清香一段未隨埋

山

はる秋の木々やいつきとをかぬまにかはるなかめの雪の山かな

側是峯分横是嶺、遠近高低不同景、幽賞何必離山中、不妨歩々入清影

浦

うちそよくいり江のあしのうら風に夕なみかけて千鳥なくなり

看盡歸帆苦屋暮、耳聞眼見畫無聲、雁聲任爾衡陽斷、別有蘆邊田鶴鳴

旅

にきはふや野山の末も道ひろく戸さしなき世のたびのゆきゝは

裹粮千里淑裝催、人不爲讐道自恢、好個太平時節子、謳歌聲裡去還來

山家

世をうしとのかれし山のおくにたに通ふこゝろの道はのこりて

數椽茆屋倚林間、綠水青山眼界寛、安得萬緣都撥置、且來此地養衰殘

閑居

ちにのえな匂ふそかりに人めなれむくらの宿はあれとしもなし

洗耳清冷憶許由、一瓢高掛樂清幽、人間暦日渾無用、閒裡任遷春與秋

祝

幾世ともかきりはあらし岩か根にわきて出ゆのたえぬなかれは

奥稱天府國君有、佛是琉璃光庇優、珍重仙城盤石固、黄河長與此泉流

十一月初五日歸山翌日登城叙謝呈上所述甚愜台情特蒙垂靑即介予謄寫奇鎭瑠璃光堂將命有司裝潢以賜予以不會國字爲辭尊君曰吾以手書和歌爲扁額已奉納矣今記已成詩已作連予和歌一筆而書何必相雜他人墨痕耶其間哉不論巧拙書之可也因退山房併添臨歸降使一段呵凍漫揮以應台命而已後之覧者一知一罪我無辭焉享保庚子仲冬長至前

仙城兩足山主蓮香國手書

神無月のころ青根山のゆあみに來りたるにれなしくつこもり香國和尙此山さとまて尋ねとはれけれは悦のあまりに

仙臺中將吉村朝臣

れもふそよかゝる太山の雪のうちにとひこしひとの心ふかさを

青根山入湯の日かすみちて府にかへりける後二日三日すき侍りて雪の降りけるに香國和尙の跡にとゝまられ侍るをとふらひつかはすとて

これ頃のやま路れ木々にくちへてれつをるも淺き庭れ志らゆき
さとはまた霜かと見るもいてゝこしあとは幾重れ山の志らゆき

青根山藥師堂奉納和歌（原作三十首今錄十二首）

年比ねちねわつらひこしう氣をふさき動氣なとゝいふものしてせのうきふしの事しけく國務なと心いれてかうかへぬれともものにくしよゝろもうとく〱しうなりぬかくては末久に國家をたもたむ事もおほつかなくおふやけ私のくすしとり〱打あつめ療養し侍れともかく〱しうもさいやきおほゆる事もなしすりやうの温泉あまたあるかなかに柴田郡靑根なりける湯はよくかゝるたくひの病に

いみしうえるしありて祖父君もふたゝひ迄こゝにゆあひ給ひてよりこゝろもされやき給ふなれは予もくまはやとくすしのすゝめゟれは明和三つのとし秋も中半なる比くみそめてよりこのかた過にし年迄に四たひこゝにきにけりその驗にやありけむ年をつみ月をかそへて病もやう〳〵おこたりぬれとともすれはかの物にくしてむねはらる、やうに覺ゆる事のやみかたくやかて老のはしめを近つくからにかくてはいつかこの病のそこてむとおもひなりつゝこたみも長月れ末つかたより三冬たつとしめ十日あまり迄浴しぬるやとに五たびのかすにもなれは分て其靈驗あらむ事をねかふとて南無藥師瑠璃光如來我病全快とさせ給へといふ事を句の上に置て秋より冬かけてのけしきこの里に名ある山川なとゝりそへて三十首れ和謌をさゝけ奉るそ花になく鶯水にそむ蛙のこゑにたくひても心をたねとするまことをは神も佛もあはれとうけひきたまれさらめかも

何くれとことわさえけき世のうさも忘れてあかぬ山れのとけき

むかひつゝいく日もあかぬから錦たちぬふ山の木々のいろこさ

やま〳〵の紅葉の中にこきませてまつも一きはいろそろひぬる

くたしみるふもとの山のそなたより朝日か、やく海のさやけさ

烟いもあらしえつめる塵のあり數も讀盡すまてすめるつはゆは

まちにあふもれとや今も笛たけれ音にかよひくるみねれまつ風

うかりけるものともいまええらさまき枕の山にれつるあらしも

いは根ふみかさなる山とわけ越てかよふやいゐに冬れかりひと

やますみに馴てそ今はまつのかせ瀧れひゝきも夜半れとをなる

となふされやまは名のみに多さひてたゝ白雲そはるのおもかけ

またもこむものとれ知れと住なれてうへるなこりは深きやま里

るたてなくめくみやかゝるくに民もゆきゝ賑ふるりのつほ湯は

また軸のうたに祈念の心を
このさひは病のそきてとことはにこゝろさはやくたるしをも哉
安永七戊戌歳十月十一日
従四位上左近衛中將重村敬白

◎散策地

●物見岩　浴塲の西、十丁にして物見岩あり、山勢甚た高峻ならすと雖ども、風光の絶美に至りては亦譬ふるにものなく、四望豁然として眼界の達するところ遠く數十里れ外に及び、豆人寸馬の布置、丈山尺樹れ濃淡は皆以て畫家の好粉本たり、古來青根温泉は勝景を以て疾病を癒するの語あり、人初めは之を信せす、一さび此に登臨去て後、過賞にあらざるを知ると云ふ、山中產する所の白石英は其質、透明玲瓏として希世の珍たり、故に騷人墨客の眷愛を享くること殊に深し、續紀に元明帝和銅六年五月、柴田郡より白石英を貢ぐ云々、俗にこれを六方石と稱す、その山麓に金鑛堀鑿の舊洞を存す、重村朝臣の古歌に

まけのはる山てふ山の峯のうへにそれと物見のいはすともしれ

●不忘山　本名を刈田岳と云ふ、山中に役願行開基れ藏王權現を祭祀せるを以て藏王山と呼び又五彩山ともいふ、延喜式神名帳の所謂苅田嶺の大社なりしが、今は鄉社に列せられ不分神社と號す、本土中央大山脈中に秀立する熄滅火山にして仙南第一の大岳たり、海面上凡そ五百六十一丈を拔き、峯影は高く蒼穹に逼り、山根は遠く磐城、羽前兩國に跨がる、去れば八月炎天の日といへども、地温れ華氏の五十七度二分を示し、氣温は六十三度內外に止まる、これに登るに澤越、峯越の二道ありて、青根浴塲より正西三里を距て、その中腹の賽河原よりは一里餘とす、昔し佛敎の熾なるや、私かに神號に換ふるに藏王權現れ名を以てし、山を冥府に擬して劒ヶ峯、灰塚、三途川等の異名を附せり、絕巓に一小祀あり遙かに仙臺城に面す、祀下は藏王沼(直經三百三十間)れある處にして俗に御竈と尊稱す即ち噴火

舊口の湖水に變じたるものにて、其水色藍の如く、四周は削壁千丈、岩片錯落として、恰かも水を湛へたる一大擂盆に彷彿たり、夏秋は候近郡の士民茲に賽するもの、毎歳數萬の多きに及ぶ、故に八、九月に至れば浴場も亦喧囂を極むといふ

賽河原は凡そ方半里に亘る不忘山腹の平野にして、巨細の燒石、浮石路傍に堆積散布す、則はち拜者先導舍のある處なり、これより漸やく山麓に下れば森林一圓に繁茂し、植物界の第三帶及び間帶を成せども以上は第四帶に變ずるを以て短小なる樅林を見、更に進みて頂上にいたれば、第五帶の下部に屬するが故に、唯僅かに偃松の蜿蜒として磊磈に生ずるを見るのみ、而して赤褐色の焦石と、凝灰岩の累層より成れる澗底には、常に斑々たる白雪を存し、到るところ絶えて鳥聲を聽かず、之に反して森林所在は山中には異草生じ、怪禽棲み、又礦石に富む、故に博物學に從事する人にして、一たび躋攀探撿の勞を辭せずんば、その利するところ極めて多からん、

綱村朝臣の詠歌に

くにたみのあまねくみちの奥なれは猶つゝしみをわすれすの山

●濁川　水源を不忘山の噴火舊口より發し、峨々温泉の前を流れ、青根温泉の南を過ぎ、冷水堂下に至り、不動瀧、三階瀧の流末、澄川と合して松川と成り、宮驛に到りて白石川に會す、水質は多量の硫黃分を含蓄し、其色常に白濁にして一魚族を產せず、概するに峨々以東は河水直下して急灘となり、回流して奔湍となり、碧岩に激し、焦石に觸れ、千容萬態殆んど凡眼を驚かす、而して此間尤も奇觀なるは、懸崖削壁並び峙ち、一帶の樹林は遙かに山腰を擁して互ひに新綠を爭そひ、一巖角を經回すれど、一峯忽ち前を遮ぎるにあり、斯の如きもの凡そ一里半にして始めて青根の山下に達す、然れども、屢々藤蘿を攀ぢ、急流を涉るの難ありて、夏月と雖ども猶四、五時間を費せど、眞に冒險健歩の人にあらざるよりは、或ひは危きを免れず

中將重村朝臣

瀬をはやみなかれも清く見るものをにこり川とは何名つけゝむ

●有耶無耶關　浴塲の北、笹谷峠と野上の中間にして、山形縣に通する路上にあり、今猶は古關と稱す、東史に文治五年八月十日、大木戸の戰、敗れ主將錦戸太郎國衡、大關山を踰えて出羽に之かんと欲す云々、蓋し大關山は有耶無耶關の別名なり、頂上に觀音堂を安置す、眺望の奇、實に言ふべからざ、古歌多し

たのみ來し人の心もかはるやと問ふても見はやうやむやのせき

土御門院御製

すく霧山なといなむやの關としもへたてゝ人に音をなかすらむ

俊頼朝臣

きりふかきとや〳〵とりの道とへは名にさへ迷ふうやむやの關

宗良親王

關据ゑしあとさへそれとうやむやの雲を戸さしのみねの通ひ路

仙臺中將重村朝臣

◎社　寺

●温泉神祠　大湯の西にあり、堂は東面九尺造にして文化十二年十月朔日の建立に係れども、其開基を詳らかにせず、本尊は青銅藥師佛にして驅長尺餘、蓮臺に端坐す、堂右の石磴數十級と登れば上に平地あり、十數人を坐すべし、遠望頗ぶる可なり、玆に八雲神社を祭る

◎物　産

木地挽物類　薪炭　菌蕈類　蕨類　山獨活　香魚　鰍魚　嘉魚　白石英

片岩名石と稱そ以上青根二　硫黄等なり

青根溫泉志大尾

宮城縣陸前國柴田郡
青根溫泉場溫泉宿
不忘閣 佐藤仁右衛門

明治廿四年七月廿五日印刷
明治廿四年七月廿八日出版
仝 年九月十一日印刷
仝 年九月十四日再版
明治廿五年九月八日印刷
仝 年九月十二日三版

正價金九錢

版權所有

著作兼發行者 宮城縣仙臺市狐小路十三番地 永澤小兵衛

印刷者 宮城縣仙臺市上染師町廿三番地 坂下桂次郎

印刷所 宮城縣仙臺市大町三丁目廿三番地 弘文館

終